

平成30年度事業報告

1. 適性ある学生の定数確保

1) 2科の定員確保

看護第2学科は平成29年度から定員を下回っている。

現役生（准看護師学生）の進学を阻んでいる原因は複数あるが、入学時から段階的に進学指導を行うことで14人の進学者を確保できた。

既卒者（准看護師として就業している者）については、負担となっていた「看護一般」を除外し、入試科目を「面接」と「小論文」とした。その結果、県外者の志願者数は増加したが定員の充足には至らなかった。

看護第1学科、准看護学科についても想定どおり志願者数の減少がみられた。

1科においては、推薦・社会人入試の合格割合を増やし、また、一般入試の定員の超過合格を行うことで定員を確保することができた。准看護学科においては、志願者数そのものが著しく減ったことで定員割れとなった。

なお、全科を対象に2次募集を行い、看護第1学科5名、看護第2学科1名、准看護学科3名を確保した。

2) 看護師適性についての発信

看護適性については①学校説明会、②高校訪問、③ホームページ掲載を中心に行い、対外的に一定の理解が得られている。

2. 学習効果を高める教育の実現

1) 効果的な授業運営

平成27年度の「特定看護行為」の制定をもとに、今後は看護師の医療行為の拡大が予想される。そのため、昨年度に引き続き、解剖生理学、病態学に連動させた授業を行った。教員個々の取り組みも進み、また、学習支援と連結した効果的な教育ができた。

新カリキュラムの改正の要旨である「多職種連携」「現場と乖離の少ない教育」については、他学科との合同演習や卒業生による救急蘇生演習などを取り入れた授業を行った。

2) 学習支援の運営

学習支援の体系は4年前に完成し、現在は、入学前の3月から、①課題学習、②「学習のしかた」（グループ学習）、③補習講義、④卒業生アシスタント学習、による支援を行っている。

その結果、看護第1学科において、平均10名（12%）前後で推移していた退学者数が6名（7.0%）へ、70%前後で推移していた標準卒業率が78.3%へと改善した。

ただし、国家試験では5名が不合格となり、学力強化が課題となった。

なお、准看護師資格試験が国家試験日と別日程となったことで、准看護師資格試験との併願が可能となり、国家試験を不合格となった学生のうち1名は准看護師として就業することができた。

3) 教員の教育力の向上

3学合同のFD宿泊研修会を行った。テーマは「協同的な学びと看護教育」と題し、講師に南山大学名誉教授 石田裕久氏を迎えた。学ぶ者の意志を尊重しはたらきかけることの意義と技法を学んだ。また、紀要4号の発刊については研究活動が進められている。

看護教員養成研修は9名(35%)が未受講であり、次年度以降の受講を計画している。

3. 学習効果を高める環境づくり

1) 学生の心理支援

教職員は学生一人一人と意思疎通をはかり、学校生活の様々な問題の解決を図っている。複雑な問題を抱えた学生に対しては早期から保護者・保証人との連携を密に対応しているが、より深刻なケース(5%程度)については、ピアサポート担当の教員が専門的な対応にあたった。これにより、教職員の障害や専門的対策への理解も深まり、学生に有効な支援が行われている。

2) 教育教材の効率的な整備と運用

在庫管理に基づいた備品管理が実現している。

3) 災害時の安全環境の確立

教職員、学生ともに、LINEによる緊急連絡システムを導入し、速やかな連絡徹底が実現した。なお、災害時の具体的な運営については、地域での学校役割も含めて検討課題としていく。

4) 効率的な業務の改善

職員の健康な心身を維持することのできる職場環境の実現にむけて、業務改善、休養の確保への取り組みを開始した。業務については組織的な運用が果たされていない分野について、フォーマットの共有やシステムの合理化、チーム力の促進など積極的に改善への努力を行っている。

なお、看護第2学科の定員割れに伴い、学科間の教員の業務量に格差が生じているため、講義、実習等の割り振りを行って業務量の均一化をはかっている。

4. 地域に向けた看護実践者の輩出

看護師国家試験は97人が受験し90人が合格、合格率92.8%(全国平均89.3%)であった。准看護師資格試験は35人が受験し全員が合格した(県平均96.9%)。

不合格者7名のうち、4名は学内の成績に問題がなかったことから、原因の究明と対応が今後の課題となっている。

進路については、県内就職者は84人(84.0%)であり、民間施設42.0%、公立施設42.0%で、設立目的の地域医療への貢献という所期の目的は達成されている。

また、准看護学科から看護第2学科への進学率は19名54.3%であった。経済事情や家庭環境などの個別事情にそった長期的な対応を続けている。